

## カキ

いにしへの やまとことばの あととめて

はるかに仰ぐ 柿のもとかな

藤原信実

手習いのため柿の葉に歌を書き留めながら、改めて大和言葉を麗しく操る柿本人麻呂のすごさを実感し、敬慕の念を禁じ得ないという内容であろう。『夫木和歌抄』に出てくる藤原信実の歌である。信実は、鎌倉時代の歌人であるとともに、似絵(大和絵系の肖像画)絵師として国宝「後鳥羽院像」なども描いている。不思議なことに、『万葉集』第一の歌人と仰がれる柿本人麻呂は登場するのに、『万葉集』には柿を扱った歌がないのである。

それでは柿は外来のものかと言えばそうではなく、堺市の四ツ池遺跡から柿の種の破片が発掘されているので、日本の弥生時代前期にはすでに存在していたことが分かる。柿は実も葉も赤いので、「赤木」が訛ったとする説がある。その「アカキ」も『万葉集』には記載がない。『大同類聚方』には「アカキ」の入った処方はいくつか載るが、柿とは同定出来ていない。

柿の効能は貝原益軒が著した『大和本草』(1709年)に載る。それまでの本草学は支那の『本草綱目』を分析する文献学であったが、益軒は自ら“大和の”草木を検証し、日本初の本草書を作り上げた。柿の項では日本各地の柿を分類するとともに、柿の実の効能については「柿ハ性寒ナリ。熱ヲ去ッテ渴ヲ止メ身ヲ潤シ腸ヲ浚ラス。声カレタルヲ療シ反胃ヲ治ス」と『本草綱目』の内容をかいつまんで述べている。

大塚敬節著『漢方と民間薬百科』は、長塩容伸氏の協力を得たとはいえ、日本古来の民間薬を集大成した名著である。ここに載る柿の効用を以下に要約してみよう。

出血(実、渋、葉、蒂)、火傷(渋)、霜焼け、打撲(実、渋)、マムシの咬み傷、蜂刺され(実、渋)、喉に骨の立ったとき(実)、歯痛(実)、指の腫れ(実)、下痢(花の黒焼き)、悪酔い(実)、しゃっくり(蒂)、咳(蒂)、中風、高血圧症(葉、渋)、タムシ(種子)、膀胱炎(実)、嗜眠(葉)、雪焼け(渋)。

なお柿の項では他に、原南陽の干し柿の効用についても触れている。また柿の葉の粉末を眼底出血に用いて効果のあった九州大学医学部の治験も報告するとともに、西勝造氏の柿の葉茶の勧めとその作り方で詳細に紹介している。西式健康法にはなくてはならない健康茶であるが、これほど柿の葉の効用を流布した人も他にあまりない。『本草綱目』では柿の葉に触れていない。柿の若葉にはビタミンCになる前のプロビタミンCが多く含まれており、これは熱に強いので、湯茶にしても破壊されないという。

筆者はこれまで柿は蒂しか使ったことがなかった。市内の病院から時々「しゃっくり」の患者を依頼され、柿蒂湯や丁香柿蒂湯を処方し喜ばれている。これからは柿の実や葉をも視野に入れたいと思う。

家の御所柿の老木はだんだん実を付けなくなった。しかし秋になると、その葉を見るのが楽しみになった。一枚の葉に赤、黄、緑、茶、黒の綾なすモザイク模様はそれだけでりっぱな芸術作品である。去年、この老木にこれまでになかったわわに実が成った。いよいよ末期の彩りかと思ったが、恐らく福島原発事故で秩父まで飛んで来た放射能の影響であろう。

柿が赤くなると医者が青くなるという。暇になったら「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」の大和地方を訪ねて、塗装を柿渋で施した店で、柿右衛門の器に載せた柿の葉寿司を食べながら、柿本人麻呂の大和心に向きあってみたいものである。

一敷島の 大和の国は 言霊の 助くる国ぞ まさきくありこそ一

(山人)

